番号	28 － 14	申　請　者	看護師 中山　里沙

【審査申請課題】

不登校児の食生活の実態調査

【審査課題の概要】

A病棟では、不登校の思春期の患児の入院を受け入れており、年齢的に親の愛情が不可欠であり、家族と共に過ごす時間が必要であるため、週末は外泊している。その際に、自宅での生活リズムや親との関わりを知る目的で、食事メニューや摂取時間、自宅での様子、家族からのコメントなどを「外泊ノート」に記入してもらい把握している。しかし、帰棟時に外泊ノートを確認すると未記入であることも多く、患児の食事や生活について家族がどの程度把握し関心を持っているのか疑問を感じることもある。長期間入院し、週1回の外泊という限られた時間の中で、このような患児や家族にとっての食事は、単なるご飯を食べるという意味だけではなく、食事を通して、親子が向きあいコミュニケーションを図るよい機会であると考える。しかし、看護師として児や家族へ食事に関する看護介入が積極的にできていない現状である。そこで、入院中の不登校児へアンケート・インタビューを行い、食生活・食事に対する思いなどの実態を明らかにし、不登校児とその家族へのアプローチや指導方法を導き出したい。

審査結果	承　認　（　平成28年9月26日　）

番号	28 ー 15	申　請　者	看護師 福島　由香里

【審査申請課題】

重症心身障害児(者)病棟における看護師・療養介助員の協働のためのベッドサイドカンファレンスの有効性

【審査課題の概要】

重度心身障害児(者)は脳の器質的病変等によって身体障害と知的障害を合わせもつが、重度心身障害児(者)は自らの意思表示が乏しい場合が多く、また、その情動は微弱で介助者の判断に左右されることが多い。また、介助者は各自の観察及び経験で判断することが多い。スタッフ個々によってケア方法に差があり、新人看護師も患者の思い・主訴を読み取ることに苦心している。

患者様中心にした総合的なカンファレンスを行うことで、より患者様の立場にたったカンファレンスができるのではないかと考えた。また、看護師と療養介助員で連携したベッドサイドカンファレンスを実施することで、患者様の意向を取り入れたチームアプローチができるのではないかと考えた。

そこで、ベッドサイドカンファレンスの有効性について明らかにしたいと考えた。

審査結果	承　認　（　平成28年9月27日　）

番号	28 － 16	申　請　者	看護師 宮脇　美紀

【審査申請課題】

癌性疼痛に対する看護師の認識と疼痛評価の実践について

【審査課題の概要】

A病棟では肺癌患者が多く、そのうち約4割の患者が癌による何らかの痛みを抱えている。痛みを抱える癌患者は、痛みにより活動意欲の低下や活動そのものを制限されており、痛みが原因で日常生活や患者自身の性格を変えることもある。このように痛みは癌患者の人生に大きく影響するものであり、癌性疼痛に対する効果的な痛みの評価と癌疼痛緩和に対するケアが求められている。痛みのアセスメントは初期アセスメントと継続アセスメントからなると考えるのが主流とされている。すなわち初期アセスメントにより痛みの部位、強さ、原因によって痛みを特徴づけ、疼痛緩和ケアの効果や副作用を評価し効果的な疼痛緩和ケアへと修正し、さらにその効果を再評価していくという手順で痛みが緩和されるまで継続アセスメントを行うものである。しかし、A病棟では現在、疼痛評価の方法が統一されたものがなく、経験年数や意識のズレなどからスタッフによって痛みのアセスメントに差があるという現状がある。そこで、癌性疼痛に対するスタッフの認識のずれを明らかにし、疼痛評価方法を統一することで、スタッフの疼痛緩和ケアへの意識の変容を図りたいと考えた。

審査結果	承　認　（　平成28年9月28日　）

番号	28 － 17	申　請　者	看護師 守嶋　美佳子

【審査申請課題】

糖尿病「ウソ・ホントクイズ」見直しを行って

【審査課題の概要】

平成27年度より糖尿病教育を目標に、入院時「ウソ・ホントクイズ」を実施した。その結果をもとに個別プログラムを作成し、教育を重ね、退院時に同じクイズで教育効果を図る患者教育を行ってきた。しかし初回の「ウソ・ホントクイズ」は2択で、患者の知識がなくてもどちらかを選択すれば正解が導き出せたため、入院時と退院時の結果に有意差が見られなかった。そこで3択クイズに変更、その回答を基に個別指導を実施、昨年同様に入院時と退院時の点数の変化で教育効果を測った。

審査結果	承　認　（　平成28年9月28日　）

番号	28 － 18	申　請　者	看護師 有働　聡子

【審査申請課題】

長期インスリン使用患者の教育のあり方
～インスリンボール形成を通して学んだこと～

【審査課題の概要】

20代よりⅠ型糖尿病でインスリン治療中の患者が、シックデイの対応ができず糖尿病性ケトアシドーシスにて入院。入院後、インスリンについて理解十分と捉えていた患者がインスリンボールを形成していた。10年以上インスリン治療を継続しているが、治療経過の中で知識の自己解釈もあることがわかった。この事例を通して、経過が長く、理解力のある患者にも段階を経た教育の必要性を考える機会となった。

研究の動機

長期インスリン使用患者でインスリン自己管理が可能であったA氏がインスリンボールを形成していた。

理解力は十分と捉えていた患者がインスリンボールを形成していた事実から、なぜインスリンボールを形成してしまったのか経緯を知り、経過の長い患者にも再教育の必要性を実感し、自分たちの看護を振り返る機会となったため研究に取り組んだ。

研究の目的

インスリン使用患者のライフステージに応じた教育内容について考える

研究方法

事例研究

審査結果	承　認　（　平成28年9月28日　）